

# チベット仏教における 「プラマーナの定義」

木 村 誠 司

## I

ダルマキールティ Dharmakīrti (600-660) が『量評釈』 *Pramāṇavārttika* 「量成就」 *Pramāṇasiddhi* 章 kk. 1-7 で扱って以来、「プラマーナの定義」 (*pramāṇa-lakṣaṇa*) は、インドの注釈家達にとって最大の関心事のひとつであった。また、近代の学者も、ここ何年もの間、「プラマーナの定義」に多大の注意を払ってきた<sup>1)</sup>。一方で、人間の認識を意味し、もう一方で、仏陀の宗教的基盤を意味するプラマーナ<sup>2)</sup>は、たしかに魅力的で重要な言葉である。古の注釈家達や近代の学者達が、共に「プラマーナの定義」すなわち「プラマーナとは何か」ということに強い関心を抱いたのも当然と言えるであろう。チベットの学僧達も、また、「プラマーナの定義」の考察に意を注いだが、彼らは、インドの注釈家達とは、いささか異なる方法を取った。チベットの学僧達は、まず、「定義とは何か」つまり「定義の定義」を問題視し、「プラマーナの定義」を「定義の定義」の付論としたのである。考察の順序として、「定義の定義」を先に明確にして置くのは、合理的と言えるであろう。しかし、そうしたからといって、チベットの学僧達が、「プラマーナの定義」を巡る問題を見事に解決できたわけではない。むしろ、彼らは、自らが作り出した定義の規則に縛られ、その知識を誇示することに汲々としているようにさえ見えるのである。本稿は、チベットの学僧達の説く「定義の定義」と「プラマーナの定義」を紹介するものであるが、結局は、不毛な議論の紹介に終止するものなのかもしれない。しかし、その不毛さを伝えることが、本稿の目的とも言えるのである。なぜなら、そうすることによって、始めて、「プラマーナの定義」を正しく考察する道も開けると思われるからである。少くとも、「プラマーナの定義」をこれまでとは全く別な角度から考察するという新たな視点の提示にはなるであろう。

## II

チベット仏教における定義についての、断片的な報告は、すでに行なわれている。ここで、その報告を簡単に見ておこう。まず、カイク Leonard W. J. van der Kuijp 氏は、サキヤ派 (Sa skya pa) の学僧コラムパ=ソナムセンゲ Go ram pa bSod mams seng ge (1492-1489) [以下コラムパ] や、セルドルパンチェン=シャーキャチョクデン gSer mdog Pan chen Shākya mchog ldan (1428-1507) [以下シャーキャチョクデン] の論理学書に基づき、「定義を問題視した最初の人物は、チャパ=チューキセンゲ Phya pa Chos kyi seng ge (1109-1169) であり、しかも、その源はインドの論理学書ではなく、『現観莊嚴論』 *Abhisamayālamkāra* に求められる」と報告した。カイク氏は、チベットで定義が問題視されるに致った経緯を明らかにした<sup>3)</sup>。次に、小野田俊蔵氏は、チベットの学問僧院において、定義 (mtshan nyid) は、所定義 (mtshon bya)・定義例 (mtshan gzhi) と共に扱われていることを紹介し、その三者の内容にも触れた<sup>4)</sup>。筆者の知る限り、この二氏の研究以外に、チベットにおける定義の問題を扱ったものはない。ただ、二氏は、定義の問題を、直接「プラマーナの定義」と結び付けることをしていない。一方、ドレイフェス G. Dreyfus 氏は、サキヤ派の学僧や、ゲルク派 (dGe lugs pa) の学僧-ギェルツァブ=タルマリンチェン rGyal tshab Dar ma rin chen (1364-1432) [以下タルマリンチェン]・ケードゥップジェ=ゲレクペルサンポ mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po (1385-1438)・ゲドゥンドゥップ=ダライラマ1世 dGe 'dun grub Dalai bla ma I (1391-1474) -の「プラマーナの定義」に対する見解を紹介した<sup>5)</sup>が、こちらは、「定義の定義」を踏えたものではない。それ故、チベット仏教における「定義の定義」と「プラマーナの定義」を総合的に考察した研究はこれまでなされていない、と言えよう。本稿では、従来の研究を補うべく、サキヤパンディタ=クンガギェンツェン Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan (1182-1251) [以下サパン] 著『量正理蔵』 *Tshad ma rigs pa'i gter* とその諸註釈書を考察の対象とすることにしたい<sup>6)</sup>。それらを取り上げる理由は、それらの論理学書が、「定義の定義」をまず論じ、付論として「プラマーナの定義」を扱っているからである。

さて、考察に入る前に、本稿の論述の範囲と方法を明らかにしておきたい。本稿で扱うのは、『量正理蔵』等で示された「定義の定義」・「プラマーナの定義」のご

く一部であって、全部ではない。『量正理蔵』では、定義は、大きく分けてふたつの手段によって規定されている。ひとつは、定義を「直接矛盾を断つ (dngos 'gal gcod)」という風に規定するもので、もうひとつは、不完全な定義に陥る欠陥を示し、その欠陥のないものを定義と規定するというものである<sup>7)</sup>。本稿では、前者だけを扱い、論を進めることとする。次に付論である「プラマーナの定義」を一部紹介し<sup>8)</sup>、すでに確認した「定義の定義」をそこに適用して、考察するつもりである。では、考察に移ろう。

### III

『量正理蔵』第八章「定義を考察する章」(mtshan nyid brtag pa'i rab tu byed pa) は、次のような記述から始まっている。

すべての認識対象 (shes bya) は、定義・所定義・定義例とという三種によって遍充されていると自己認識によって確立される。なぜなら、認識対象の形象 (rnam pa, ākāra) が知に現われる時、他と共通でない (gzhan dang mi 'dra ba) 形象、その同じものが誤りのない言語知 (sgra blo) によって判断され得るもの、基体 (gzhi) を伴ったものとして現われるからである。

…定義とは、これによって理解させるもの (go bar byed pa) 規定者 (rnam 'jog) という因のことである、〔牛を例にとると〕すなわち、〔牛の〕瘤や垂れ肉のようなもの (don, artha) という性質 (chos, dharma) である。定義対象とは、これが理解されるもの (go bar bya ba) 被規定者 (rnam gzhas) という果のことである、すなわち、牛という名称 (tha snyad, vyavahāra) のような知 (blo) という性質である。定義例とは、ここにおいて理解される基盤 (rten) のことである、すなわち斑〔牛〕のようなものである。この三者とも、実在物 (don) たる自相 (rang mtshan, svalakṣaṇa) の部分から生じず、他者排除 (gzhan sel anyāpoha) にすぎないのである。(『量正理論』 p. 181, ll. 1-12)

shes bya thams cad la mtshan nyid / mtshon bya / mthan gzhi rnam pa  
gsum gyis khyab par rang rig gis 'grub ste / shes bya'i rnam pa blo la 'char  
ba na / gzhan dang mi 'dra ba'i rnam pa dang / de nyid la sgra blo ma '  
khrul bas zhen du rung ba dang / gzhi dang bcas par 'char ba'i phyir  
ro / … mtshan nyid ni 'dis go bar byed pa rnam 'jog gi rgyu ste nog lkog  
shal lta bu don gyi chos so / mtshon bya ni 'di go bar bya ba rnam gzhas

(26) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

gi 'dras bu ba lang gi tha snyad lta bu blo'i chos so / mtshan gzhi ni 'di la  
go bar bya ba'i rten te dkar zal lta bu'o / gsum po 'di 'ang don rang mtshan  
gyi cha nas mi 'gyur gyi / gzhan sel nyid yin no /

ここで、サパンが、定義例=ある一群の概念を形成する個々の存在(個々の牛)、  
定義対象=その一群の概念を示す言葉(牛という名称)、定義=その一群の概念を  
特徴付けるもの〔瘤や垂れ肉という牛に固有な特徴〕というような規定を説いてい  
るだとすれば、理に合ったものだと言えよう。ただ、筆者は、サパン説を十分理解  
できていない。特に、「ものという性質」don gyi chos と訳した don の意味が、ま  
るで理解できない。定義等はすべて他者排除という概念の世界である以上、「実在  
物たる自相」don rang mtshan の don と同一視するわけには、いかないだろう。  
don は対象・意味と訳すこともできるが、その訳語もふさわしくない。課題を残し  
たままであるが、ここでは、ごくごく基本的なことだけを確認しておこう。すなわ  
ち、プラマーナを考察する上で、定義例=知覚(pratyakṣa)と推理(anumāna)、  
所定義=プラマーナ、定義=(X) という扱い方が許されるのであろう。

次に「定義の定義」<sup>9)</sup>をみてみよう。サパンは、以下のように、定義を定義して  
いる。

何であれ直接矛盾(dngos 'gal)を断つ実質概念(don ldog)が成立している  
もの。それが定義である、つまり〔つばの定義である〕「中央部が膨らみ端のす  
ばまっているもの」〔が直接矛盾を断つ実質概念である〕ように〔牛の定義であ  
る〕「瘤や垂れ肉があるもの」も直接矛盾を断つ実質概念が成立しているのであ  
る。(『量正理蔵』p. 189, ll. 10-12)

gang dngos 'gal gcod pa'i don ldog grub pa de mtshan nyid yin te lto ldir  
zhabs zhum bzhin nog lkog shal 'dus pa 'ang dngos 'gal gcod pa'i don ldog  
grub bo

直接矛盾<sup>10)</sup>について、サパンは、『量正理蔵』第7章「矛盾を考察する章」('gal ba  
brtag pa'i rab tu byed pa)において、次のように述べている。

自己以外のものを否定するのが直接矛盾であり、定義であると確定されるので  
ある。たとえるなら、常(rtag, nitya)と無常(mi rtag, anitya)青(sngon  
po)と非青(sngo min)等である。…しかし、非青は、白や黄色等という他の  
すべての事物でもあるのだから、反対項('gal zla)は事物として成立するので  
あると言うならば、〔答えよう。〕非青の概念は、絶対否定(med dgag, prasajya

pratiṣedha)たる非実在であるが、相対否定(min dgag, paryudāsapraṣedha)の事物を否定対象とするものではないので、過失はないのである。(『量正理蔵』 p. 179, ll. 16-21)

rang min 'gog pa dngos 'gal yin / mtshan nyid do zhes sbyar ro / dper na rtag mi rtag dang sngon po sngo min la sogs pa dang / … / 'o na sngo min ni dkar po dang ser po la sogs pa dngos po gzhan thams cad kyang yin pas 'gal zla dngos por grub bo zhe na / sngo min gyi ldog pa med dgag dngos med yin gyi ma yin dgag gi dngos po dgag bya ma yin pas skyon med do / 理解を助けるために、注釈書を見ておこう。コラムは、次のように注釈している。

定義の定義は、直接矛盾を断つ実質概念が成立しているものである。すなわち、「直接矛盾を断つ」ということによって、それ以外のものを断ち、「実質概念」ということによって、所定義と定義例のふたつを断ち、「成立しているもの」ということによって、自相と対象としての普遍(don spyi)<sup>11)</sup>それぞれに区分されない「中央部が膨らんでいること」一般(lto ldir ba tsam)を示しているのである。実質概念は対象としての普遍のことであるが、それ自身、自相と対象としての普遍それぞれに区分されない「中央部が膨らんでいること」一般として成立しているからである。(『量正理蔵の難解個所の説明 七部明説』 *Tshad ma rigs pa'i gter gyi dka' ba'i gnas rnam par bshad pa sde bdun rab gsal* [以下『七部明説』] p. 53/2, ll. 5-6)

mtshan nyid kyi mtshan nyid / dngos 'gal gcod pa'i don ldog grub pa ste dngos 'gal gcod pa zhes pas ni de min gcod la / don ldog gcod pas ni mtshon bya dang / mtshan gzhi gnyis gcod / grub pa zhes pas ni rang mtshan dang don spyi so sor ma phye ba'i lto ldir ba tsam ston te / don ldog ni don spyi yin la / de nyid rang mtshan dang don spyi so sor ma phye ba'i lto ldir ba tsam la grub pa'i phyr ro /

さて、筆者は、「実質概念」と訳した don ldog の意味が理解できていない。小野田俊蔵氏によれば、学堂用教科書において、概念は、spyi ldog, gzhi ldog, don ldog, rang ldog に分けられている。小野田氏は、「つばの定義は、つばの実質概念に遍充される」bum pa'i mtshan nyid yin na bum pa'i don ldog yin pas khyab 等という文章も紹介し、概念を説明する。<sup>12)</sup>とはいえ、『量正理蔵』にそれをその

(28) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

ままだ嵌てよいとは限らない。『量正理蔵』「定義を考察する章」には、実は、rang ldog, don ldog は頻繁に出てくるが、すでに説明され終わった自明のものとして扱われているので、その意味はつかみにくい。従って、筆者は don ldog の意味が理解できず、適切な語訳も与えられない。ともあれ、ここでは、直接矛盾を断つもの=実質概念=定義という確認だけは、許されるであろう。

さて、定義は所定義との関係上、さらに厳密な制限を加えられる。サパンは、次のように言う。

ひとつの定義に多くの所定義〔が存在したり〕ひとつの所定義に多くの定義〔が存在したりすること〕はあり得ないので、数は等しい…因と果は所生 (skyed bya)・能生 (skyed byed) なので、縁の力で多くの結果〔が生ずること〕はあり得るが、定義と所定義は被規定者と規定者なので、ひとつによってふたつを規定することはできないのである。多くの定義によって、ひとつの所定義を示すこともできないのである。(『量正理蔵』 p. 207, l. 21-p. 208, l. 22)

mtshan nyid gcig la mtshon bya du ma dang mtshon bya gcig pa mtshan nyid du ma mi srid pas grangs mnyam pa … rgyu 'gras bskyed bya bskyed byed yin pas rkyen stobs kyis 'bras bu du ma srid la / mtshan nyid dang mtshon bya rnam par bzhag jog yin pas gcig gis gnyis jog mi nus so / mtshan nyid du mas mtshon bya gcig mtshon pa 'ang mi rung

このように、所定と所定義は厳密に1対1であることが規定されたのである。

さて、『量正理蔵』における「定義の定義」等の説明は、以上見てきたことに止まらないが、「プラマーナの定義」に移るための材料は一応そろった。次に「プラマーナの定義」に関する記述を見てみよう。

#### IV

以下の記述に登場するのは、デーヴェンドラブッディ Devendrabuddhi (630-690)・シャーキャブッティ Śākyabuddhi (660-720)・プラジニャーカラグプタ Prajñākaragupta という三人のインドの注釈家である。「プラマーナの定義」に対する彼らの見解は、すでに近代の学者達によって明らかにされている<sup>13)</sup>。『量正理蔵』等に見られる三人の見解の内容は、近代の研究が示すものとほぼ一致するが、彼らの見解に対する批判は、「定義の定義」の理解を前題としなければ、全く意味不明のものである。以下では、まず、デーヴェンドラブッディ・シャーキャブッティに

関する記述を列挙しよう。

サパン

〔提示〕アジャリデーヴェンドラブッディ (slob dpon lha dbang blo) は, [「欺かないこと」(mi slu ba, avisamvāda) と「未知の対象を明らかにすること」(ma shes don gsal, ajñātārthaprakāśa) という「プラマーナの定義」] いずれによっても, [「プラマーナという所定義を」] 示すことができると説く。(『量正理蔵』 p. 210, ll. 4-5)

slob dpon lha dlang blo gang yang rung bas mtshon nus zhes gsung ba

〔批判〕両者が, 「プラマーナの定義」であるのは不適切である。なぜなら, 所定義もふたつとなるからである。(『量正理蔵』 p. 212, ll. 1-2)

gnyis ka tshad ma'i mtshan nyid yin pa mi 'thad de / mtshon bya 'ang gnyis su 'gro bas so /

コラム(A)

〔提示〕アジャリデーヴェンドラブッディは, いずれでも, ひとつひとつによっても, それぞれ示すことができるので, 定義は別々のものであると主張する。なぜなら, [デーヴェンドラブッディの『量評釈』に対する] 注釈で, 「そのように, プラマーナの定義「欺かないこと」という第一のものが示されたのである。「未知の対象を明らかにすることも」というのは, 別な第二〔の定義〕である」<sup>14)</sup>と説いているからである。(『七部と経の真意を無顛倒に解説する量正理蔵の意義解明』 *sDe bdun mdo dang bcas pa'i dgongs pa phyin ci ma log par 'grel pa tshad ma rigs pa'i don gsal bar byed* [以下『意義解明』] p. 315/4. ll. 5-6)

sbob dbon lha dbang blo ni gang rung re res kyang so sar mtshon nus pas mtshan nyid so sor 'dod de / 'grel par / de ltar na tshad ma'i mtshan nyid mi bslu ba gcig bshad do / ma shes don gyi gsal byed kyang gzhan mtshan nyid gnyis pa yin no zhes gsungs pa'i phyir ro /

〔批判〕そのプラマーナという所定義がふたつとなる。それ〔「プラマーナ」〕は, ふたつの実質概念を持つ定義による規定を求められているからである。自派(rang)においては一致しない。なぜなら, 「欺かないこと」と「未知の対象を明らかにすること」のふたつは実質概念が同一だからである。(『意義解明』 p. 316/

(30) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

1. 1. 6)

tshad ma de mtshon bya gnyis su 'gyur te / de mtshan nyid don ldog gnyis  
kyis 'jog dgos pa'i phyir / rang la ni mtshungs te / mi bslu ma shes don gsal  
gnyis don ldog gcig yin pa'i phyir ro /

コラムノ(B)

〔提示〕デーヴェンドラブッディ・シャーキャブッディ (lha shā ka) ふたりは、それぞれがまた、「プラマーナの定義」を完成する (yongs su rdzogs pa) 別々のものであり、それは、また実質概念が異なっている、と主張する。なぜなら、デーヴェンドラブッディの注釈で、「そのように、プラマーナの定義「欺かないこと」という第一のものが示されたのである。「未知の対象を明らかにすることも」というのは、別の第二の定義である」と〔説かれ〕、その復注 ('grel bshad) で、シャーキャブッディが「『別の第二の定義』」というものは、世俗 ('jig rten)によって考察されるので、これは、第一であり、一方これは別な第二種類のものである<sup>15)</sup>」と説いているからである。(『七部明説』 p. 55/3, ll. 2-4)

lha shā ka gnyis kyis re re yang tshad ma'i mtshan nyid yongs su rdzogs  
pa re re yin zhing de yang don ldog tha dad du 'dod de / lha'i grel par de  
ltar tshad ma'i mtshan nyid mi bslu ba cig (read gcig) bshad do / ma shes  
don gyis (read gyi) gsal byed kyang gzhan mtshan nyid gnyis pa yin no zhes  
dang / de'i 'grel bshad du shās gzhan mtshan nyid gnyis pa zhes bya ba ni  
'jig rten gyis dpyod par byed pas 'di ni gcig yin la 'di ni gzhan rnam pa gnyis  
pa yin no zhes gsungs pas so /

〔批判〕そのプラマーナという所定義の意味が、ふたつの別なものになる過失に陥る。それ〔=プラマーナ〕が、ふたつの別な実質概念によって示されるからである。(『七部明説』 p. 56/1, l. 6)

tshad ma de mtshon bya'i don tha dad pa gnyis yin par thar / de don ldog  
tha dad pa gnyis kyis mtshon par bya ba yin pa'i phyir /

ロオケンチェン=ソナムルンドゥブ Glo bo mkhan chen bsod nams lhun grub  
(1456-1532)〔以下ロオケンチェン〕

〔提示〕アジャリデーヴェンドラブッディは、所定義であるプラマーナは、〈欺



かないこと>と<未知の対象を明らかにすること>いづれによっても、示すことができる、と説く。なぜなら、彼自身の注釈で、「そのようにプラマーナの定義<欺かないこと>という第一のものが示されたのである。<未知の対象を明らかにすることも>は、別な第二の定義である」と説明しているからである。(『七部と経の真意を注釈する量正理蔵注の解説 正理道明説』sDe bdun mdo dang bcas pa'i dgongs 'grel tshad ma rigs pa'i gter gyi 'grel pa'i rnam bshad rigs lam gsal ba'i nyi ma [以下『正理道光明』] p. 264, ll. 4-6)

slob dpon lha dbang blo na re / mtshon bya tshad ma ni mi bslu ba dang  
ma shes don gsal gang yang rung bas mtshon nus zhes gsungs te / de nyid  
kyi 'grel par / de ltar tshad ma'i mtshan nyid mi bslu ba gcig bshad do /  
ma shes don gyi gsal byed kyang / gzhan mtshan nyid gnyis pa yin no /  
zhes bshad pas so

[批判] アジャリデーヴェンドラブッディが定義はふたつであると御主張になるのも、不適切である。なぜなら、所定義もふたつとなるからである。それに関して、「ひとつの所定義に多くの定義はあり得ない」と先に〔示した、さらに、〕「定義と所定義の数は等しい、本質は同一である」と説明し終ったのである。(『正理道光明』 p. 266, l. 6-p. 267, l. 1)

slob dpon lha dbang blo mtshan nyid gnyis su bzhed pa 'ang mi 'thad de /  
mtshon bya yang gnyis su 'gro bas so / de la mtshon bya gcig mtshan nyid  
du ma mi srid par gong du / mtshan mtshon grangs mnyams ngo bo gcig /  
ces bshad zin to /

タルマリンチェン

[提示] アジャリデーヴェンドラブッディは、<欺かないこと>と<未知の対象を明らかにすること>のふたついずれによっても、プラマーナを示すことができるので、同義語であると主張する。(『量正理蔵の解説 善説心髄』<sup>16)</sup>Tshad ma rigs pa'i gter gyi rnam bshad legs par bshad pa'i snying po [以下『善説心髄』], 79a/6-79b/1)

lha dbang blo mi bslu ba dang ma shes don gsal gnyis gang yang rung bas  
mtshad mar mtshon nus pas rnam grangs par 'dod pa

[批判] ふたつの定義によって、ひとつの所定義を規定するのは、不適切とな

(32) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

る。〈欺かないこと〉と〈未知の対象を明らかにすること〉のふたつは、対象としての普遍が同じでなく別々のものとして現れるのだから、そのふたつの定義によって、プラマーナであると規定するならば、無錯乱知 (blo ma 'khrul ba) によって、プラマーナであると判断され得る所定義それもふたつとならなければならぬからである。(『善説心髓』79b/6-80a/1)

mtshan nyid gnyis kyis mtshon bya gcig 'jog pa mi 'thad par thal / mi slu  
ba dang ma shes don gsal gnyis don spyi mi 'dra ba so sor snang bas mtshan  
nyid de gnyis kyis tshad mar 'jog na ni blo ma 'khrul bas tshad mar zhen  
rung gi mtshon bya de yang gnyis su 'gyur dgos pa'i phyir /

『量正理蔵』と注釈書において提示されたデーヴェンドラブッディ説やシャーキャブッディ説の内容は、近代の研究によって明らかにされたものと基本的に一致する<sup>17)</sup>。したがって、チベットの学僧達の〔提示〕は正確なものである。しかし、彼らは、「何故、定義をふたつとしたのか」と問いかけることはしていなかった。彼らには、デーヴェンドラブッディ説等の内容の当否は、問題にもならないのであり、定義上の規則だけが関心事なのである。デーヴェンドラブッディ説等は、とどのつまり、「定義と所定義は1対1関係でなければならない」という規則に違反しているという、ただそれだけの理由で批判されているにすぎない。では、プラジニャーカラグプタ説は、どのように提示され、どのように批判されているのだろうか。次にそれを見てみよう。

サパン

〔提示〕〔『量評釈』〕 莊嚴 (rgyan, alaṃkāra) の著者 [=プラジニャーカラグプタ] は、勝義 (don dam pa, pāramārthika) のプラマーナと世俗 (tha snyad pa, sāmvyavahārika) のプラマーナのふたつのうち、最初のもは、無二知という感受 (myong ba gnyis med kyi shes pa), 聖者達が個々に自己認識する智慧の対象に関して、明らかに感受するのがそれであり、勝義でもあるが、プラマーナでもあるので、勝義のプラマーナである。その定義は、〈未知の対象を明らかにすること〉であるが〈欺かないこと〉ではない。なぜなら、判断の対象 (bcad pa'i don) の獲得がないからである。世俗のプラマーナは、凡夫の心の流れに存在するもの、所取・能取 (gzung 'dzin, grāhyagrāhaka) が二として顕われている間、世俗としてふさわしいものなので、その定義は、〈欺かないこ

と〉と〈未知の対象を明らかにすること〉の集合したもの (tshogs pa) である。なぜなら、判断の対象の獲得があるからである、と説く。(『量正理蔵』p. 210, ll. 5-13)

rgyan mdzad pas don dam pa'i tshad ma dang tha snyad pa'i tshad ma gnyis las / dang po ni myong ba gnyis med kyi shes pa 'phags pa rnam kyis so sor rang gis rig pa'i ye shes kyi yul du gyur pas gsal bar myong ba de yin te / don dam pa yang yin la tshad ma yang yin pas don dam gyi tshad ma 'o // de'i mtshan nyid ma shes don gsal yin gyi mi bslu ba ma yin te bcad pa'i don thob pa med pa'i phyir ro // tha snyad pa'i tshad ma ni so so skye bo'i rgyud la yod pa gzung 'dzin gnyis su snang ba'i bar la tha snyad du rung ba yin pas de'i mtshan nyid mi bslu ba dang ma shes don gyi gsal byed tshogs pa yin te bcad pa'i don thob pa yod pa'i phyir ro zhes gzungs pa

〔批判〕勝義のプラマーナと世俗のプラマーナのふたつに分けることも、「プラマーナの共通定義 (spyi'i mtshan nyid) は何か」と問うならば、「個々の定義はこれである」と述べることは〔その問いとは〕無関係であり、ひとつの共通定義がないならば、プラマーナという所定義がひとつであるのは、不適切だからである。(『量正理蔵』 p. 212, ll. 4-7)

don dam pa'i tshad ma dang tha snyad pa'i tshad ma gnyis su byed pa'ang tshad ma spyi'i mtshan nyid ci yin zhes dris na so so'i mtshan nyid 'di yin zhes brjod pa ma 'brel pa dang / spyi'i mtshan nyid gcig med na tshad ma zhes mtshon bya gcig mi 'thad pa'i phyir ro /

コラム(A)

〔提示〕『莊嚴』の著者は、勝義のプラマーナと世俗のプラマーナふたつのうち、最初の定義は、〈未知の対象を明らかにすること〉であるが、〈欺かないこと〉ではない、なぜなら、判断の対象の獲得がないからである。後者の定義は、〈欺かないこと〉と〈未知の対象を明らかにすること〉の集合したものである。なぜなら、判断の対象の獲得があるからである、と説くのである。(『意義解明』p. 315/4, l. 6-p. 316/1, l. 1)

rgyan mdzad pas don dam pa'i tshad ma dang / tha snyad pa'i tshad ma

(34) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

gnyis las / dang pa'i mtshan nyid ma shes don gsal yin gyi / mi bslu ba ma  
yin te / bcad pa'i don thob pa med pa'i phyir ro // phyi ma'i mtshan nyid /  
mi bslu ba dang ma shes don gsal tshogs pa yin te / bcad pa'i don thob ps  
yod pa'i phyir zhes gsungs so /

〔批判〕〔プラジニャーカラグプタ説は不適切である。なぜなら〕「プラマーナの  
共通定義は何か」という問いの答えとして、共通定義を全く示さず、「個々の定  
義はこれである」と述べることは〔その問いとは〕無関係だからである。(『意義  
解明』 p. 316/2, ll. 2-3)

tshad ma spyi'i mtshan nyid gang yin zhes dris pa'i lan du spyi'i mtshan  
nyid bstan rgyu med par so so'i mtshan nyid 'di yin zhes brjod pa ma 'brel  
ba'i phyir ro /

コラム(B)

〔提示〕勝義のプラマーナと世俗のプラマーナふたつのうち、第一のものは、無  
二知という感受、聖者達が個々に自己認識する智慧によって対象として明らか  
に感受するものがそれであり、その定義は、〈未知の対象を明らかにすること〉  
であるが、〈欺かないこと〉ではない、なぜなら、判断の対象 (dpyod pa'i don)  
の獲得がないからである。第二のものは、凡夫の心の流れに存在するもの、所取・  
能取が二として顕われている間、世俗としてふさわしいものであり、その定義  
は、〈欺かない知〉である。なぜなら、判断の対象を獲得するからである。と〔プ  
ラジニャーカラグプタは〕御主張になる。すなわち、『莊嚴』という注釈書で、  
「ここで、対象という言葉によって、勝義が述べられているのである。〈未知の  
対象を明らかにすること〉という言葉によって、勝義を明らかにすることという  
意味〔が述べられているの〕である」<sup>18)</sup>、そして、「そのうち、これ〔= 〈未知  
の対象を明らかにすること〉〕は、勝義のプラマーナの定義であり、一方、前者  
〔= 〈欺かないこと〉〕は、世俗の〔定義〕である」<sup>19)</sup>と説かれているからであ  
る。『量正理蔵』自注において「世俗のプラマーナの定義は、〈欺かないこと〉と  
〈未知の対象を明らかにすること〉の集合したものである〔というのが、プラジ  
ニャーカラグプタの〕真意である、と説かれているのである。(『七部明説』p. 55/  
3, l. 4-p. 55/4, l. 2)

don dam pa'i tshad ma dang / tha snyad pa'i tshad ma gnyis las / dang po

ni / myong ba gnyis med kyi shes pa 'phags pa rnam so so rang gis rig pa'  
 i ye shes kyi yul du gsal bar nyams su myong ba de yin la / de'i mtshan  
 nyid ni ma shes don gsal yin gyi mi bslu ba ma yin te dpyad pa'i don thob  
 med pa'i phyire ro // gnyis pa ni / so so skye bo'i rgyud la yod pa gzung  
 'dzin gnyis su snang ba'i bar la tha snyad du rung ba yin la de'i mtshan nyid  
 mi bslu ba'i shes pa yin te / bcad pa'i don thob pa'i phyir so zhes bshed de /  
 rgyan gyi 'grel par / 'dir don gyi sgras ni don dam pa brjod pa yin te / ma  
 shes don gyi gsal byed ces bya ba'i sgras ni don dam pa gsal byed ces bya  
 ba'i don to zhes dang / de la 'di ni don dam pa'i tshad ma'i mtshan nyid yin  
 la snga ma ni tha snyad pa'i yin no zhes gsungs pas so // rigs gter rang '  
 grellas / tha snyad pa'i tshad ma'i mtshan nyid / mi bslu ba dang / ma shes  
 don gsal tshogs pa dgongs pa yin par gsungs so /

〔批判〕〔プラジニャーカラグプタ説は不適切である〕。プラマーナの共通定義を規定する個所で、勝義のプラマーナと世俗のプラマーナふたつに区分して、定義を規定するのは、無関係である故に、そうでないならば、「プラマーナの共通定義は何か」と問われた場合、知覚と推理 (mngon rje) ふたつに区分して、そのふたつの定義を規定することによっても、プラマーナの共通定義の規定が済んでしまう故に。また、この『量評釈』で、プラマーナの共通定義を直接示す本文はないことになる。前後のいかなる本文によっても、プラマーナの共通定義は示されていないからである。(『七部明説』 p. 56/2, ll. 4-6)

tshad ma spyi'i mtshan nyid 'jog pa'i skabs su don dam pa'i tshad ma dang  
 tha snyad pa'i tshad ma gnyis su phye nas mtshan nyid 'jog ma 'brel ba'i  
 phyir dang / gzhan du tshad ma spyi'i mtshan nyid gang yin zhes dris pa  
 na mngon rje gnyis su phye nas de gnyis kyi mtshan nyid bzhag pas kyang  
 tshad ma spyi'i mtshan nyid bzhag pa'i go chod par thal ba'i phyir ro //  
 gzhan yang / rnam 'gel 'dir tshad ma spyi'i mtshan nyid dngos su ston pa'  
 i gzhung med par thal / gzhung snga phyi gang gis kyang tshad ma spyi'  
 i mtshan nyid ma bstan pa'i phyir /

ロオケンチェン

〔提示〕アジャリ『莊嚴』の著者は、勝義のプラマーナの定義は、〈未知の対象

(36) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

を明らかにすること〉であるが、世俗のプラマーナの定義は、〈未知の対象を明らかにすること〉と〈欺かないこと〉の集合したものである。なぜなら、判断の対象を獲得するからであると、説く。すなわち、彼自身の注釈書で、「これは、勝義のプラマーナの定義であり、一方、前者は、世俗の〔定義〕である」と説いているのである。(『正理道光明』 p. 265, ll. 1-3)

slop dpon rgyan mdzad pa na re / don dam pa'i tshad mi'i mtshan nyid ni  
ma shes don gsal yin la / tha snyad pa'i tshad ma'i mtshan nyid ni don gsal  
dang mi bslu ba tshogs pa yin te / bcad pa'i don thob pa yin pa'i phyir ro  
zhes gsungs te / de nyid kyi 'grel par / 'di ni don dam pa'i tshad ma'i  
mtshan nyid yin la / snga ma ni tha snyad pa yin no zhes gsungs so /

〔批判〕「プラマーナの共通定義は何か」と問うならば、「個々の定義はこれである」と述べることは無関係であり、ひとつの共通定義がないならば、ひとつの所定義もないことになるので〔プラジニャーカラグプタ説は〕不適切である。(『正理道光明』 p. 267, l. 4)

tshad ma spyi'i mtshan nyid ci yin zhes dris na / so so'i mtshan nyid 'di yin  
zhes brjod pa ma 'brel ba dang / spyi'i mtshan gcig med na mtshon bya gcig  
kyang med par 'gyur bas mi 'thad do /

タルマリンチェン

〔提示〕『莊嚴』の著者は、前者は世俗のプラマーナの定義、後者は勝義のプラマーナの定義なので、区分して述べている。すなわち、所取・能取が別体(rdzad tha dad) でないことを知覚において理解する智慧が、勝義のプラマーナであるが、そこには、判断の対象の獲得はないので、〈欺かないこと〉ではないのである。世俗のプラマーナは、所取・能取ふたつとして現われる凡夫の心の流れにおいても存在するので、その定義は、〈欺かないこと〉であるが、〈未知の対象を明らかにすること〉を適用しても、矛盾はない、と説く。(『善説心髓』79b/1-3)

rgyan mdzad pas snga ma tha snyad pa'i tshad ma'i mtshan nyid dang /  
phyi ma don dam pa'i tshad ma'i mtshan nyid yin pas phye ste smra te  
gzung 'dzin rdzad tha dad kyi stong pa mngon sum du rtogs pa'i ye shes  
don dam pa'i tshad ma yin la de la bcad don thob pa med pas mi slu ba ma  
yin no // tha snyad pa'i tshad ma ni / gzung 'dzin gnyis su snang ba so so

skye bo'i rgyud la yang yod pas / de yi mtshan nyid mi slu ba yin la ma shes  
don gsal zhugs kyang 'gal ba med gsungs pa

〔批判〕ひとつの共通定義、つまりプラマーナ一般の定義があり得ないことになる。〔なぜなら〕、アジャリ師弟 (yab sras) の説く<sup>補註1)</sup>、〈欺かないこと〉は、世俗のプラマーナの定義、〈未知の対象を明らかにすること〉は、勝義のプラマーナの定義なので、ふたつの定義とふたつの所定義を主張しているのだとしても、主張は不合理だからである。主張するするならば、「プラマーナの定義は何か」と問われた時、規定できなくなるのである。(『善説心髓』80a/2-3)

spyi'i mtshan gcig ba ste tshad ma tsam gyi mtshan nyid mi srid par 'gyur  
thal / slob dpon yab sras kyis gsungs pa'i mi slu ba tha snyad pa'i tshad ma'  
i mtshan nyid dang / ma shes don gsal don dam pa'i tshad ma'i mtshan nyid  
yin pas mtshan nyid gnyis dang mtshon bya gnyis su 'dod na yang te 'dod  
mi rigs pa'i phyir / 'dod na tshad ma'i mtshan nyid ci zhes dris na bzhag  
tu med par 'gyur ro /

プラジニャーカラグプタ説を提示する中で、コラムバ(B)だけが、近代の研究成果と一致する。近代の研究では、勝義のプラマーナの定義=〈未知の対象を明らかにすること〉、世俗のプラマーナの定義=〈欺かないこと〉とされているからである<sup>20)</sup>。コラムバ(B)以外の〈提示〉は、すべて、世俗のプラマーナの定義=〈未知の対象を明らかにすること〉と〈欺かないこと〉の集合としている。コラムバ(B)は、これをサパン流の解釈とするが、経証として引用されたプラジニャーカラグプタの言葉から見ても、サパン流の解釈は妥当ではないであろう。さて、一方、チベットの学僧達の〈批判〉は一致している。プラジニャーカラグプタ説も、結局のところ、「定義と所定義は1対1関係でなければならない」という定義上の規則に違反していることになるのである。プラジニャーカラグプタ説の内容の当否など、やはり、問題とならなかったのである。

こうして、チベットの学僧達は、「定義の定義」に基づいて、「プラマーナの定義」を考察していくが、彼らの考察は、はたして、実りあるものだろうか。第一、デーヴェンドラブッディ等が、「定義の定義」をチベットの学僧達と同じように意識していたという確証もないのである。先に紹介した「定義の定義」には、インド論理学書からの経証がひとつも見当らないということも不思議である<sup>21)</sup>。チベットの学僧達が、自ら作り出した規則を、ただ「プラマーナの定義」に当嵌てみたという

(38) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

のが実情なのかもしれない。よしんば、そうだとしても、『量正理蔵』等で示された見解が理に合ったものであれば、よしとしなければならない。しかし、デーヴェンドラブッディ等への批判は、何ら合理的ではなかったし、むしろ言いがかりめいたものである。ここで、やや先取りになるが、サパン等の「プラマーナの定義」に関する結論部分を見て、その合理性を探してみよう。

サパンは、次のように言う。

アジャリディグナーガ (phyogs kyi glang po, Dignāga) は、典籍のある部分で〈欺かないこと〉ある部分で〈未知の対象を明らかにすること〉を説いているが<sup>補注2)</sup>、吉祥なるダルマキールティ (chos kyi grags pa) は、そのふたつの真意は同一であるとし、その知はその対象に対して欺かない能力を持つことだけを御主張になったのである。(『量正理蔵』 p. 213, ll. 2-6)

slob dpon phyogs kyi glang pos gzhung gi cha 'ga' zhig tu mi bslu ba dang  
'ga' zhig tu ma shes don gsal du gsungs la / dpal ldan chos kyi grags pas  
de gnyis dgongs pa gcig tu mdzad nas blo de don de la mi bslu ba'i nus  
pa nyid la bzhed pa yin no /

コラムパは、サパンの見解を受けて、次のように述べる。

〈欺かない知〉だけによって、「プラマーナの定義」は完成しているのである。…『量評釈』や『量決択』(rnam 'grel nges)の諸典籍は、〈欺かないこと〉を満たしているか、満たしていないかということに基づいてプラマーナであるなしを規定しているように見えるが、「新たに…」〔＝〈未知の対象を明らかにすること〉〕という語句を加えているようにはみえないからである。(『七部明説』 p. 58/3, l. 3-4, l.2)

mi slu ba'i shes pa tsam gyis tshad ma'i mtshan nyid yongs su rdzogs pa yin  
te … rnam 'grel nges kyi gzhung rnam kyis mi slu ba tshang ma tshang  
gi sgo nas tshad ma yin min gyi rnam bzhag mdzad par snang gi gsar du  
zhes pa'i thig bsnan pa mi snang ba'i phyir

筆者も、〈未知の対象を明らかにすること〉を〈欺かないこと〉に含めるということの合理性を、一応認める。その意味で、サパン等の見解に合理性がないとは言わない。けれども、「プラマーナの定義」を本格的に説く『量評釈』『量成就』章が、凡夫にとって未知の対象である仏陀の教説を明らかにすることを目的とするものだとなれば、〈未知の対象を明らかにすること〉という定義は、別立すべきである



う。サパン等の見解は、「量成就」章の目的を全く無視したものであり、経局は、不合理なものであると言えよう<sup>22)</sup>。もし、サパン等が、「量成就」章の目的に真剣に目を向けていたならば、デーヴェンドラブッディ等へのアプローチは、はるかに実りあるものになったであろう。サパンやコラムパの見解は、「定義の定義」等の論理学上の規則や、インドの論理学書に対する核博な知識を示すものである。しかし、彼らは、自らの知識を誇示することばかりに心を砕いているにすぎない。「プラマーナの定義」が抱える本当の問題を考察する意志など、彼らは始めから持ち合わせていなかったのかもしれない。筆者には、彼らの議論は不毛なものにしか見えないのである。はたして、その不毛さを乗り越えて、議論を展開した学僧達は、チベットに存在したのだろうか。残された課題は多いが、以上で、ひとまず、稿を閉じよう。

#### 注

- 1) 「プラマーナの定義」に関する主な研究は、以下の如し。
  - ①木村俊彦『ダルマキールティ宗教哲学の原典研究』木耳社 s. 56, pp. 32-38
  - ②谷貞志「逆行する認識論と論理」平川影古稀記念論集『仏教思想の諸問題』春秋社 1985, pp. 534-55
  - ③渡辺重朗「『量評釈莊嚴』に於ける量の定義」成田山仏教研究所紀要 第一号 1976, pp. 367-370
  - ④稲見正浩「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(1)」広島大学文学部紀要 第51巻 1992, pp. 59-75, 「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究(2)」同 第52巻 1993, pp. 21-41
  - ⑤ S. Katsura: Dharmakirti's Theory of Truth, *Journal of Indian Philosophy* 12, 1984, pp. 000-000
  - ⑥ V. A. van Bijsterveld: *Epistemology and Spiritual Authority* (WSTB, 20) Wien, 1982
  - ⑦ E. Franco: The Disjunction in Paramāṇavārttika, *Pramāṇasiddhi Chapter 5c (Studies in the Buddhist Epistemological Tradition ed. by E. Steinkellner)* 1991, pp. 39-51
  - ⑧ C. Lindner : The Initial Verses of the Pramāṇasiddhi Chapter in the Pramāṇavārttika ( " ) pp. 155-159
  - ⑨ G. Dreyfus: Dharmakirti's Definition of Pramāṇa and its Interpreters ( " ) pp. 19-38
  - ⑩ E. Steinkellner & H. Krasser: *Dharmottaras Exkurs zur Definition gültiger*

(40) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

*Erkenntnis in Pramānaviniścaya*, Wien, 1989

①H. Krasser: *Dharmottaras kurze Untersuchung der Gültigkeit einer Erkenntnis Laghuprāmānyaparīkṣā*, Teil 1-2, Wien, 1991

②拙稿「プラマーナの定義について」駒沢短期大学仏教論集 第1号 1995, pp. 180-169

2) M. Hattori: *Dignāga On Perception*, Harvard, 1968, pp. 23-29

3) Leonard W. J. van der Kuijp: *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology*, Wiesbaden, 1983, pp. 65-69

4) 小野田俊蔵「mtskan ñid と mtshon bya について」印仏研 vol. 33, no. 1, 1984, pp. 92-95

5) 注1)の⑨論文

6) 『量正理蔵』には、サパンの自注があり、両者を区別すべきであるが、訳の都合上、本稿では、区別していない。また、シャーキャチョクデンの注釈は、今回使用しなかった。彼の注釈は、他と比して、独自の解釈が目立ち、情報量も多すぎて、筆者には扱い切れなかったためである。

7) 欠陥は三種であり、次のように述べられている。「不遍充 (ma khyab, avyāpti) ・ 過大遍充 (khyab che, ativyāpti) ・ 非存在 (mi srid, asaṃbhava) の三つが、定義の一般的欠陥である」(『量正理蔵』 p. 195, ll. 5-6) ma khyab khyab ches mi srid gsum / mtshan nyid kyi ni spyi'i skyon yin /

この三種の欠陥に関して、ダルマキールティの著作が経証として引用されている。

「『量評釈』「為他比量」parārthānumāna 章 k. 85 および『量決択』*Pramānaviniścaya* 「為他比量」章 k.23において), ‘自己 (bdag nyid, svayam) ・ 不変化辞 (tshig phrad nipāta) ・ 本質 (ngo bo, rūpa) という言葉, 無反論 (ma bsal ba, anirākṛta) を伴ったものは、過剰 (ldog pa, vyatireka) [=過大遍充] を排斥するのである’と説くことによって、過大遍充を断ち, 『量評釈』「為自比量」章 k. 85 および『量決択』「為自比量」章 k. 23において), ‘主張された ('dod, iṣṭa) という言葉によって、不遍充 (ma khyab, avyāpti) を排斥する’と述べることで、不遍充を断ち, 『量評釈』「為自比量」章 k. 86 および『量決択』「為自比量」章 k. 24において), ‘所証 (bsgrub bya, sādhyā) と認められることが、主題 (phyogs, pakṣa) の定義である。それらにおいて、主題たり得ないのは、反論が無効であり、残りのものにおいて、定義が存在しないからである’と述べられたことは、非存在を意図しているのである。(『量正理蔵』 p. 195, ll. 17-21)

bdag nyid tshig phrad ngo bo'i sgra // ma bsal ba dang bcas pa rnam // ldog pa sel bar byed pa yin // zhes gsungs pas khyab ches pa gcod cing / 'dod sgras ma khyab sel bar byed // ces pas ma khyab pa gcod la / bsgrub byar khas blangs phyogs mtshan nyid // de rnam la ni phyogs nyid med // bsal ba gnod dang lhag ma la // mtshan nyid 'jug pa med phyr ro // zhes mi srid pa la dgongs pa yin no /

これらの偈の内容については、T. J. F. Tillemans: *Pramānavārttika* IV(5), WZKS Bd. XXXIX, 1995, pp. 116-118 参照。なお、この三種の定義の欠陥は、インドの非仏教諸派で説かれたものと酷似している。佐藤裕之『「定義の定義—インド哲学における「定義」をめぐって—」』*仏教文化*第32号・第33号合併号 H7, pp. (3)-(29)参照

- 8) 紹介できない個所では、定義の欠陥という面から、インドの注釈家達—ダルモッタラ Dharmottara とシャンカラナンダナ Śāṅkaranānanda—の見解を批判している。その内容は、別稿で扱う予定である。
- 9) 本稿では、定義等に関する様々な論議を一括して、「定義の定義」と表現している。これは、『量正理藏』第八章の章名に従ったためであるが、ラフなものである。
- 10) 小野田俊蔵「'brel ba と'gal ba について」*印仏研* vol. 31, no. 1, 1982, pp. 91-94, S. Onoda: *Monastic Debate in Tibet* (WSTB, 27) Wien, 1992, pp. 92-97 参照
- 11) *spyi* に関しては、小野田俊蔵「*spyi* と *byed brag* について」*印仏研*, vol. 30, no. 2, 1982, pp. 127-130 参照
- 12) 小野田俊蔵『「*ldog-pa*」について』*印仏研* vol. 28, no. 2, 1980, pp. 146-147
- 13) 注1)の②, ③, ⑥, ⑦, ⑫参照
- 14) 注1)－② pp. 540-542, ⑥ pp. 150-152, ⑦ p. 40, ⑫p. 176 参照
- 15) 注1)－⑫p. 176, ⑨ p. 26 参照
- 16) この注釈書の存在については、シチェルバッキー Scherbatsky, Th. が報告している (*Buddhist Logic* vol. 2, p. 323, n. 4) が、長らく利用できない垂涎の書であった。タルマリンチェンは、サキャ派と対立関係にあったゲルク派の高僧なので、彼の注釈は興味深い。本稿で扱った範囲では、タルマリンチェンがサパンを批判している個所はなかった。
- 17) 注14)の諸研究参照
- 18) 『量評釈注』*Pramānavārttikabhāṣya* (TSWS. 1) p. 30, ll. 19-20, 『量評釈莊嚴』*Pramānavārttikālalāṅkāra* (デルゲ版) Te. 26b/2-3
- 19) 注1)－② pp. 542-543, ⑦ pp. 41-42, ⑫p. 173 参照
- 20) 注19)の諸研究参照
- 21) インド仏教における定義について、筆者は何も確実なことを知らない。ただ、注7)で見たように、定義の欠陥に対しては、確実な経証があった。とすれば、ダルマキールティやインドの注釈家達も定義に対する明確な意識を持っていた、と考えてもよいのかもしれない。しかし、定義の欠陥以外の規定に関して、それがインド由来のものである、と判断するのは早計であろう。しかしながら、インド由来のものであることを窺わせるかのような記述は見られるので、ここで、紹介だけしておこう。

「定義例 (*mtshan gzhi*) を示しているのである」というのは、知覚が所定義 (*mtshon par bya ba*) の基盤に他ならないからである。「分別を離れている」という定義 (*mtshan*

(42) チベット仏教における「プラマーナの定義」(木村)

nyid) によって知覚が示されているからである。(シャーキャブッディ著『量評釈注』*Pramāṇavārttikaṭikā*, デルゲ版, Nye 180b/1-2)

mtshan gzhi bstan to zhes bya ba ni mngon sum ni mtshon par bya ba'i gzhi nyid  
yin pa'i phyir ro // rtog pa dang bral ba can zhes bya ba'i mtshan nyid kyis mngon  
sum mtshon par bya ba yin pa'i phyir ro

拙稿「分別について」駒沢大学仏教学部研究紀要, 第51号, H. 5, p. 287, 注11) 参照<sup>(注の注)</sup>

22) 注1) - ②pp. 175-172 参照

### 使用テキスト

サハバン

『量正理蔵』民族出版社, 1988, 北京

コラムパ

『意義解明』サキヤ派全集, vol. 11

『七部明説』サキヤ派全集, vol. 12

ロオケンチェン

『正理道光明』Manduwall, Dehra, Dun, Pal Ewan Chodan Ngorpa Centre, 1985

タルマリリンチェン

『善説心髓』ed. by G. B. J. Dreyfus & S. Onoda, 西藏文献選集 3, 1994

1996 7/8脱稿

(注の注) プラジニャーカラグプタの著作にも, 定義に関する言及が見られるので, 以下に紹介しよう。

〈欺かない知〉といわれるもの, それだけが定義であるのだから, どうして, 別な定義があるのか。然らず。間接的に指示されたもの (*sāmarthyākṣipta, don gyis 'phangs pa*) は, 定義ではないからである。何であれ, 言明から間接的に (*uktasāmarthyatas, brjod pa'i shugs kyis*) 理解されたもの, それは, 定義ではない。

*avisamvadi jñānam iti tad eva lakṣaṇam iti katham lakṣaṇāntaram / na / sāmarthyākṣiptasyālakṣaṇatvāt / uktasāmarthyato yasya pratitis tan na lakṣaṇam /* (『量評釈注』 p. 30, ll. 9-11)

*mi slu ba'i shes pa zhes bya ba de nyid mtshan nyid yin pa'i phyir ci ltar mtshan nyid gzhan yin zhe na ma yin te / don gyis 'phangs pa ni mtshan nyid ma yin pa'i phyir ro / brjod pa'i shugs kyis rtogs pa gang // de ni mtshan nyid ma yin te /* (『量評釈莊嚴』 Te 26a/6)

7 / 9

補注1) アジャリ父子が誰を指すかは、不明である。

補注2) 注2)の Hattori 本, p. 74, n. 1-3 参照